

令和7年度 村上市立神林中学校 学校経営方針

校長 横山 雅史

〇 はじめに

令和6年度は開校6年目を迎え、5年間の歴史の上に、「生徒のために」を合い言葉に、生徒の成長を支える教育活動を展開してきた。また、PTA役員をはじめ、保護者や家族の皆様や、学校運営協議会等の地域の方々のご理解やご協力をいただきながら、地域とのつながりを実感し、体験から学ぶ活動を実施し、部活動の地域移行もさらに進めることができた。

令和3年度から取り組んできた神林中学校独自の防災教育についても、防災士会との連携による持続可能なプログラムを作成し、随時改善しながら進めることができた。今後もこの伝統を引き継ぎ、防災教育を通じてたくましい生徒を育成したい。

神林中学校の良さは、生徒一人一人が素直で優しく思いやりがあるところである。また、学校及び生徒は理解ある家庭や地域に支えられている。そして、神林中の生徒は、体育祭や合唱コンクール等の目標があると、他と協力して一つにまとまり、自分たちも周りの人も感動するような活動をやり遂げることができる。

課題は、将来への目標や向上心がやや低く、楽な方に流れやすいところ。そして、困難を乗り越え、努力を続けたり、視野を広げ、自分の考えとは異なる考えを受け止めたりして、自分を高めたり、お互いに切磋琢磨したりする力が足りないところである。

部活動の地域移行が進む中、日々の教育活動や行事等を通じて、すべての生徒について認知能力とともに非認知能力の向上を意図的に進め、心身ともにたくましい生徒の育成を図る必要がある。このような実態を踏まえ、真に生徒に必要な力は何か、そのためにはどのような教育活動が必要かを考え、家庭や地域の協力を得ながら、ともに生徒を育成していく。

1 教育目標

学ぶ心 思う心 挑む心

2 教育活動スローガン

善悪の眼 本気の耳 挨拶の声

- ・正しい判断力を身に付け、公正な立場から他に働き掛ける生徒
- ・相手の話を真剣に聞き、主体的に粘り強く取り組む生徒
- ・明るくさわやかな声が響き合い、温かな人間関係でつながる生徒

3 学校経営方針

①経営の基底

生徒のために

主役は生徒。全ての考えや行動は「生徒のためにあるかどうか。」「学校で学ぶ意義は何か。」置かれた状況の中で、より効果を上げるためにはどうすれば良いのか、を常に考え、諸機関との連携、保護者や地域との合意形成を図りながら、決定、実現していく。

②目指す学校像

生徒一人一人に居場所が在り、のびのびと成長できる学校

どの生徒も安心して活動でき、自己存在感や充実感を得ることができる場所や場面をつくり出すことが「居場所づくり」である。生徒は、そのような環境の中で、一人一人がもっている個性を発揮しながら成長し「生きる力」を身に付けていく。そのような学校を目指す。

③目指す生徒像

自ら学び共に学んで、考えを深める生徒

進んで他とかかわり、相手を思いやる生徒

目標に挑んで心身を鍛える、健康でたくましい生徒

④目指す教師像

人を大切にし、授業を大切にし、チームで動く教師

生徒の話を聞き、共に動き、かかわり、寄り添い、生徒を理解しようとする教師。

保護者、地域の方等に丁寧に対応し、同僚を尊重してお互いを高め合い、常に自分の力を高めようと努力を重ね、組織で動くことができる教師を目指す。

4 今年度の重点

(1) 学ぶ心 「自ら学び共に学んで、考えを深める生徒」の育成へ向けて

①生徒全員参加でつくる「分かる授業」「成長を実感する授業」

- ・「生徒が主役」の魅力ある授業

生徒の思考の流れ、動きをイメージした授業づくり

教える授業 + 考えさせる授業（村上市授業づくりの方針に則って）

- ・教科のプロとして、教科の魅力を伝える授業

先生が楽しく生き生き → 生徒も楽しく生き生き

- ・配慮を要する個を意識した「全員参加」の手立てと授業のUDL化＝きめ細かな配慮による全員が分かりやすい授業

②主体的に学ぶ学習習慣の育成

- ・プランニングタイムを活用した学習を含めたバランスのとれた習慣育成
- ・フォーサイトアプリを活用した計画、記録、振り返りによる自己管理能力の育成

③「授業を通じた生徒指導」授業で居場所づくり

- ・スキを作らない意図的計画的な指導 生徒の反応を推測し、生徒のプラス面を引き出すための授業準備 全員が小さな「できた」を感じる方策、工夫
- ・小さな「できた」を認め、褒め、強める授業
- ・分からない生徒、終わった生徒に対する対応を準備して、空白時間を作らない。
- ・授業で規律、自立の育成、授業で自己有用感

④ICTの有効活用

- ・ICTを活用した、より分かりやすい授業の実現と業務の効率化
- ・ICTを使った、全員参加、個別最適化した学習の充実

⑤謙虚に進化、挑戦する教師

- ・「こうしたい」「もっと良くしたい」を持ち続ける教師
「私の授業はこれで良い」→授業の退化の始まり
- ・自分の中での、小さな挑戦、工夫を続け、振り返る教師。
- ・他の教員の授業を見ること、授業を見てもらうことで学び、改善、進化を続ける教師（相互参観、小中連携授業参観）

（２）思う心 「進んで他とかかわり、相手を思いやる生徒」の育成へ向けて

①自己肯定感、自己有用感を感じられる活動（キャリア、総合、行事）の充実

- ・生徒の成長する姿をイメージし見通しをもった３年間の意図的、系統的な計画と実践
- ・生徒を認め、育てる視点でのサポート体制（生徒のつまずきを予測した準備、計画）
- ・早めの見通しをもった準備で実現する生徒の手による運営と成功体験
- ・一人一人の居場所、活躍の場所がある「一人一役」「適材適所」
- ・活動後の振り返りと価値付けで高まる生徒の自己有用感

②役立つ喜び、つながる喜びを感じる活動による社会性育成

- ・異学年集団での活動の充実
- ・地域と連携した貢献活動、防災教育の実施

③道徳教育の充実

- ・自己開示、自己表現の場の設定による、自分のこととして考える道徳の実践
- ・多様な人間性に触れる学年職員輪番制道徳

④人権教育、同和教育の充実

- ・人権尊重の視点に立った学級経営
- ・小中学校９年間を見通したカリキュラムに従った実践
- ・「かかわる同和教育」の視点に立った実践、共有

（３）挑む心 「目標に挑んで心身を鍛える、健康でたくましい生徒」の育成へ向けて

①すべての活動の基盤となる健康と習慣、自己管理能力の育成

- ・全校体制での習慣育成（プランニングタイムの指導＋コメントの交換 状況把握）
- ・フォーサイトアプリを使った計画・記録・振り返りの徹底、継続による習慣育成
- ・毎日の健康観察とフォーサイトアプリによる幸せにつながる持続可能な生活習慣の育成（学習、食事、運動、メディアコントロール、睡眠、余暇の有効活用）

②たくましく強い心の育成

- ・行事、学級、教科、学年活動、部活動等の中での挑戦の場の設定十個に応じた支援
- ・特別の教科道徳の授業や体験的活動を通じた克己心や努力を続ける心の育成

③体力の向上

- ・保健体育の授業、日々の生活習慣等を通して、各自の体力向上を意識する生徒の育成
- ・学校行事や部活動等、運動、体力向上への取組の推奨

(4) 地域がひとつになって子どもを育てる体制の充実

①地域・家庭との連携

- ・学校運営協議会やPTAと連携し協力した学校行事等の実施運営
- ・融合型部活動運営協議会と連携した部活動の地域移行（令和8年度部活動終了）
- ・学校だよりやホームページ、ブログによる情報発信

②小中連携による9年間を見通した人づくり

- ・神林中学校区小中連携推進事業（学力向上部、小中連携部、人権教育、同和教育部）を通した9年間を見通した系統的指導、連携

③神林中防災教育によるたくましい生徒の育成

- ・地域（市危機管理室、防災士会、まちづくり協議会）と連携した計画的、系統的な防災教育 岩船中学校との共同実施＝統合への架け橋

④「子どものため」に1枚岩になるPTA

- ・互いの思いを理解し、隙間を作らない協力体制（粘り強い合意形成）
- ・生徒を認め、励まし、見守り、支える家庭(地域)
- ・目的へ向けて進化、実行する組織

(5) 教職員の基本的な構え

①困り感に寄り添い、粘り強くあきらめない職員集団

- ・一人一人の教員の持ち味（強さ、弱さ、個性）を生かした、全職員体制での対応「チーム医療」の意識
- ・「困った子」は「困っている子」生徒の「良くなろうとする力」を信じ、「あきらめない」粘り強い指導
- ・「注目はその行動を強化する」長所や関心のあることに注目し、小さな変化（現状維持でも）肯定的な声かけ、笑顔や声のトーンで良さを伝え、行動を強める。
本人が気付いていない良さを伝えるために、生徒の言動に関心をもち、よく見る。
「良いところがない子はいない」
- ・信頼関係を土台に 人格を大切に「温もりのある」指導
生徒の話を聞き、共に動き、かわり、寄り添い、生徒を理解しようとする教師。
- ・厳しい指導の場面ほど丁寧な言葉遣い、冷静な態度 「大人扱いして大人にしていこう」
○厳しい ×冷たい ○温かい ×甘い
- ・生徒が「否定された」と感じるような「上から目線」「心理的攻撃」と感じる指導の改善
- ・「言う」だけでなく「分からせる」ための丁寧な指導 「伝わらなければ指導ではない」

②生徒、同僚にエネルギーを与え、援助希求をキャッチできる「余裕とゆとりがある職員」

- ・「不機嫌は罪」＝「話しかけたい」「相談したい」「安心できる」と感じさせる態度、表情を身に付けた「教育のプロ」を目指す。
- ・早めの起案、分担によるチームでの業務推進「一人で仕事を完結しない。」（ミス防止、業務引継、組織の意識）
- ・「締め切り遅れ」「情報不足」「見通し不足」「急な変更」「急な対応」が招く、多忙感 不信感の防止
- ・「前例踏襲」「やることが目的」からの脱却 目的を見極め「やめる」「変える」に柔軟な小回りのきく職員集団
- ・勤務時間外の仕事を「当たり前」にしない勤務体制 職員の健康、余裕が学校の基盤
- ・運転、飲酒等どんなときも正常な判断ができる「ゆとり」と「プライド」をもつ職員